

尾瀬自然教室



一日目

毎年恒例となっている尾瀬自然教室が7月28日~7月30日の2泊3日の日程で行われた。鴨宮駅から高崎経由で沼田駅に到着。そこからバスに乗って宿泊先の片品村戸倉を目指す。沿道には白いアジサイが咲き乱れ、遠くには武尊山が見えた。バスに揺られること1時間余りで目的地の戸倉バス停に着いた。

夕食前に佐藤伸一教諭による『尾瀬の自然』をテーマにした講義が開かれた。事前に配布された「尾瀬自然観察ハンドブック2019」を使いながら尾瀬の地理、生態系や保護活動などについて広く学んだ。ごみの持ち帰りが尾瀬から始まったことや他の場所から植物の種などを運びこまないように尾瀬の湿地の入り口にマットが用意されていることを知った。

夜は、参加者によるプレゼンテーションが行われた。各自テーマを決めて事前に調べてきた内容を発表し、その後質疑応答となった。尾瀬の成り立ち、尾瀬に生息する植物、尾瀬の自然保護、尾瀬の高層湿原、シカによる食害およびその対策や尾瀬が特別記念物特別保護地区になった理由と保護対策についてなどテーマは多岐にわたった。3年連続で参加している生徒もおり、自分の意見を述べる姿が頼もしい。佐藤教諭からの追加説明に期待に目を輝かせながら“佐藤ゼミ”は終了した。明日はいよいよ尾瀬ヶ原の見学だ。



二日目

早朝3時半起床。4時半に宿を出発する。尾瀬ヶ原の入り口である鳩待峠に着いた時あたりはまだ薄暗かった。昨日学習した通りマットで靴底のごみを落とし湿原に向かう。石段を下りて歩き始めると木立の間から朝日が顔を出す。なんだか幸せな気分になる。前日の天気予報では降水確率が90%ということだったので皆の願いが天に届いたかのようだった。今回の自然観察のミッションは以下の2つ。

- ① 深刻化するシカの食害と踏み荒らしを記録しよう。
- ② イトトンボの水中産卵を観察しよう。

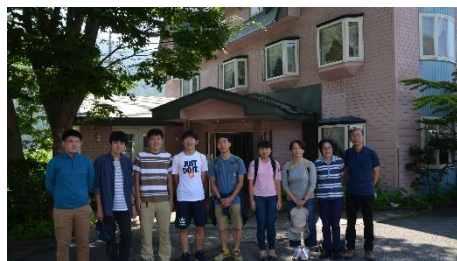


歩き始めると鳥のさえずりが聞こえてくる。佐藤教諭が鳴き声の特徴を指摘し、耳を澄ま

して鳥の存在を確認する。ウグイス・コマドリなど多くの鳥が生息しているのがわかる。尾瀬自然教室の対象は鳥だけにとどまらない。植物や昆虫を見つけては佐藤教諭が丁寧に解説していく。そのガイドの様子は通りすがりの観光客も足を止め耳を傾けるほどである。カニの甲羅に似たところから名前がついたカニコウモリの話や日本で最小（体長3cm）のハッチョウトンボの話など興味が尽きない。

尾瀬の湿原には中央を貫くように木道が敷かれている。その一本一本の木には設置者や設置された年が刻印されているが、前夜の事前学習がなければ気づかずに通り過ぎていってしまったであろう。山ノ鼻～三又～竜宮へと歩く途中で獣道を見つける。ミッションのひとつであるシカによる食害が観察された。竜宮まで到達した時に雨雲が発生してきたので、東電小屋に向かうことを断念して鳩待峠に引き返す。行きはきれいに見えた逆さ燧も水面にさざ波が立ち、見ることはできなかった。自然は刻々と変化し、表情を変える。今年はランの当たり年ということで緑の絨毯にトキソウのピンクが映える。ニッコウキスゲの黄色やカラマツソウの白色も彩を添えてとても美かった。

夜は観察した生き物をハンドブックに添付してあるシールで確認していった。初級から上級編までであったがほとんどの種類を見つけることができた。その後、参加者が観察したポイントや感想について述べ、尾瀬の現状や自然を保護するために何ができるか話し合い、尾瀬の自然観察は終了した。



三日目

宿の人に見送られて、東洋のナイアガラと呼ばれる吹割の滝に向かう。台風6号の影響で水かさが増していて、ごうごうと水しぶきをあげて落下する様子は迫力満点。水しぶきがミストシャワーとなり心地よい。涼を求める人にとっては格好のスポットである。遊歩道を使い、吊り橋からの眺めを堪能した。

2泊3日と限られた時間ではあったが尾瀬の魅力について触れることができた。最近の科学技術の進歩はめざましく、4Kによる色鮮やかな映像が配信されている。またスマートフォンでキーワードを検索すればたくさんの情報が手に入る。それでも尾瀬の広大な自然を自分の目で見て、空気を吸い、肌で感じると体験してみないと気づかないものがある。シカの食害をうけている尾瀬の現状にふれた時、私たちが尾瀬の自然を守るために何ができるか考えるきっかけとなった。来年はどのような尾瀬の魅力に出会えるのか今から楽しみである。

